トヨタ財団レポート
THE TOYOTA FOUNDATION REPORT
東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F(〒160)
TEL.(03)344-1701～3
Jan. 1981 No.12

各財団で助成成果の発表会あい次ぐ

昨年の秋，いくつかの民間助成財団の報告会があい次いで行われました。

●まず11月6日にはポーラ伝統文化振興財団による映像記録「うるしを現代に生かす」の発表会があり，

●11月15日にはトヨタ財団による第5回国際部門セミナー「アジアの植物環境保全に適した澱粉生産植物の開発利用」が開催され，(P3参照)

●11月17・18日には内藤記念科学振興財団による第4回内藤財団シンポジウム「生体防御の機構(II)」が開催されました。

●また，同じ18日本田財団による第2回東京会議「エコ・テクノロジーの提唱」が開かれ，

●11月20日には鹿島学術振興財団の第3回研究発表会が行われました。

●さらに11月27・28・29日にはトヨタ財団により，財団設立5周年記念事業の一環として「街と建物—明治・大正・昭和」東京シンポジウムが開催されました。(下記およびP4・5参照)

財団による助成成果の発表にあたっては，基本的には助成を受けた者が自らの自主性と判断によって行うべきものであり，助成を行った者があまり立入るべきではないのかもしれません。しかし，わが国のように必ずしも助成財団の活動内容が十分には社会に理解されておらず，また財団自身もその活動内容について試行錯誤を行っている段階においては，現在行っていることを世に問うという意味でも，このような，財団の主体性に基づく報告の機会を持つことも重要ではないでしょうか。

国際助成活動の今後の展開のために
——第1回国際活動アドヴァイザー会議開催——

トヨタ財団では，これまでも助成活動をどう進めていくかについては実に数多くのさまざまな方にご相談し，ご意見を求めてきたが，5年間の蓄積の上に国際助成活動の一層の展開・充実を目ざし，この度国際活動アドヴァイザー会議をもつこととした。その第1回の会議が昨年11月28日東京のパレスホテルで開催され，示唆に富む活発な論議が展開された。(詳しくはP2参照)

●4・5月に研究助成の中間報告会を計画

昨年5月，一つの試みとして特定課題についての中間報告会を行ったが，研究者からも好評を得，また私共財団関係者も多いに得るところがあった。本年は助成研究全てについて中間報告を行う予定で現在プログラムを検討中である。中間報告会での相互討論がその後の研究推進の上での良い刺激となり，新しい学術上の交流が生まれることを期待したい。(詳しくは次号でお知らせします)

「街と建物——明治・大正・昭和」3日間にわたり東京で総括シンポジウム

近代建築史研究会と当財団は昨年2月以来，10都市で標記の巡回報告会を行ってきたが，その最終の総括シンポジウムが11月28，29，30日の3日間東京日比谷のプレスセンターホールで開催された。日本の近代化を街と建物をとうしてどう読みとるか。近代の遺産をどう継承していくかがこのシンポジウムの大きなテーマであった。(詳しくはP4，5参照。写真左は第4セッションの討論場面)

国際活動アドヴァイザーから助言をいただく

――第1回アドヴァイザー会議開催――

トヨタ財団では，国際助成を始めてから今年度が5年目にあたります。そこで今後の当財団の国際活動をより充実させて，より意義の深いものにしていくために，11月から15人の専門家の先生方に国際活動アドヴァイザーをお引受けいただくことになりました。

飯島茂(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授) 飯田経夫(名古屋大学経済学部教授) 石井米雄(京都大学東南アジア研究センター教授) 梅棹忠夫(国立民族学博物館館長) 衛藤瀋吉(東京大学教養学部教授) 大野徹(大阪外国語大学ビルマ語学科教授) 緒方貞子(上智大学国際関係研究所教授) 永積昭(東京大学文学部教授) 中根千枝(東京大学東洋文化研究所所長) 西川潤(早稲田大学政治経済学部教授) ヨゼフ・ピタウ(上智大学学長) アリフィン・ベイ(筑波大学大学院地域研究科客員教授) 武者小路公秀(国際連合大学副学長) 村田博(国際交流基金参与) 矢野暢(京都大学東南アジア研究センター教授)
の諸先生です。

※　※　※

11月28日の夕刻，第1回アドヴァイザー会議を開き，当財団の諸活動および今後の計画に対する助言や示唆をいただきました。以下に会議の模様をご紹介します。

当財団は3年前より「隣人をよく知ろう」プログラムを行っています。これは，東南アジアの人々の著作を日本の一般読者に紹介するものですが，プログラムの進行に伴って，日本人の著作（文学および社会科学関係書）を東南アジアに紹介することにも努力をして欲しい，という要望が東南アジアの人々から強くなって来ました。当財団では現在，その可能性を検討中ですが，アドヴァイザーの先生方の議論はこの点に集中しました。

日本についての著作には外国人の著作と日本人の著作とがあるが，日本と東南アジアを直接結ぶことが必要であるため，日本人の著作のみを翻訳の対象とすべきである，という意見が，ベイ氏，梅棹氏，緒方氏から出され，他の出席者からの賛同がありました。ライシャワーの「ザ・ジャパニーズ」のように外国人の視点で書かれた優れた著作もありますが，あくまで日本人の視点を紹介することに徹した方がよろしかろうということです。当財団の「隣人をよく知ろう」プログラムも，東南アジアについての東南アジアの人の著作を紹介することに徹していますので，考え方としてそれと「対」になるわけです。

次に，日本人の著作を日本語版から直接現地国語に翻訳するかそれとも，英語版があるものについてそれを現地国語に翻訳するか，という議論になりました。東南アジアとの直接理解の促進のためには，日本語からの翻訳に徹すべきである（梅棹氏），日本人の学者の中にも東南アジア諸語の文献を直接読むことに努力している人々がいるのだから，東南アジア側の学者も日本語を直接読む努力をして欲しい，英語版から訳す方が容易ではあろうが，日本語から翻訳をしようとする人々が少しずつ東南アジアに出てきているので，英語版は翻訳の際の参考にとどめ，日本語からの翻訳の動きを促進すべきだ（石井氏），日本文学で英語版になっているものは，西欧の目から見た日本文学ということで，三島，川端，安部などの作品に限られているので，英語版を離れて，もっと違った視点で現代の日本文学を紹介すべきだ(村田氏)，等の意見が出されました。一方，日本語から直接訳すよりも英語版からの方が翻訳者が得られ易いのではないか，また例えば社会科学書の翻訳を，日本文学を専攻している人に日本語から翻訳してもらうよりも，社会科学を専攻している人にその英語版を翻訳してもらう方が，内容がつかめているので正確ではないか（中根氏），日本語からの翻訳は理想としては賛成である，しかし日本語からの訳では翻訳のスピードが遅くなること，また東南アジアの共通語は英語であることを考えると，現実的には，英語版から訳すことと日本語版から訳すことの両方が必要である（永積氏），梅棹氏の言う高度の直接理解は，日中関係のように長い蓄積があって初めて可能である，最終的な目標は直接理解であるが，次善の策として英語版からの翻訳も必要である（衛藤氏），という意見が出されました。なお，日本語から東南アジア諸語に翻訳ができる人々の人脈をつくる必要がある，日本人と東南アジアの人が組んで翻訳する方法も考えられる（武者小路氏），英語から東南アジア諸語への定訳をつくる作業は'60年代に行われているので，今後は日本語からの定訳をつくる作業が必要である（衛藤氏），定訳をつくるためのシンポジウムを行うべきである（矢野氏），等の示唆がありました。

（岩本　記）

第5回国際部門セミナー

テーマ：「アジアにおける未利用澱粉資源植物開発の必要性――特にエタノール燃料生産等を目的とする澱粉植物栽培の急増が，食糧供給と植物環境保存にもたらす影響について」

日　時：昭和55年11月15日(土)　午後1：15～5：00

場　所：国際文化会館（東京都港区六本木）

プログラム：

話題提供

ニューヨーク植物園アジア部長・主席研究官
ニューヨーク市立大学教授　小山　鐵夫

討論

司　会	東京大学名誉教授	杉　二郎
討論者	九州大学農学部教授	上田誠之助
	東京農業大学農学部教授	近藤　典生
	東京大学農学部教授	高井　康雄
	千葉大学理学部教授	沼田　真
	アジア経済研究所	野中　耕一
	東北大学農学部助教授	星川　清親
	東京大学名誉教授	門司　正三
	東京農業大学農学部教授	山本　出
	大阪市立大学理学部教授	山本　武彦

（敬称略）

今回報告された研究はニューヨーク植物園アジア部長の小山鐵夫博士が当財団の国際部門助成を得て東南アジアの研究者と共同で2年間にわたり進めてきたもので，アジアの未開発植物資源の現状とその利用上の問題点を探ろうとするものです。

未開発植物資源の中でも特に澱粉生産植物は人類の主食供給源として重要ですが，石油に代る燃料として植物澱粉および糖等の炭水化物発酵によるエタノール燃料（ガソホール等）の開発利用が急がれている現在，その重要性は益々高まってきています。

エタノール燃料生産のためには膨大な量の澱粉や糖の生産を要し，ブラジルではこの目的のために，そのサバンナに適したキャッサバが栽培されています。しかしキャッサバを自然条件の異なる東南アジアへ大規模に導入することには，自然生態系の破壊などの問題が予想されます。

そこで小山博士は東南アジアの資源植物のインベントリーを作成し，その中から真に東南アジアに適した作物としてアジア種のカンナ（Canna speciosa）等の利用がアジアの集約型農業と調和する点を指摘しました。

この提案に対して植物生態学，農学（作物学，土壌学，育種学等）および農業経済学，そしてバイオマスの専門家がそれぞれの視点から新しい作物導入の可能性と問題点を取上げ，活発な討論が行われました。

植物生態学の立場からは土地の風土的条件，雨量，植物の分布，土壌などを総合的に判断して適地を選び，輪作などの栽培方法を研究し群落生態を考慮して農業化を進めるべきであるという意見が出されました。農学および農業経済学的視点からは新しい作物導入の際にはその栽培方法に強いコントロールが必要であり，特に発展途上国では計画生産が困難であることを念頭に置かずに大規模な農業化を考えることは危険である点が指摘され，バイオマスの側面からはその国の食糧供給状況などの社会的条件を考慮に入れて，コスト・バランスを考える必要があるという意見などが述べられました。今後の方向性を探るブレーンストーミングとして，議論が自然科学上の問題のみに終始せず，社会科学的視点も十分取り入れて行われたことの意義は大変大きいものではないかと思います。　（若山　記）

左より　近藤，高井，沼田，門司，杉，小山，星川，野中，山本出，山本武彦，上田の各氏

（第１セッション）

「街と建物―明治・大正・昭和」東京シンポジウム

昨年２月の名古屋市を皮切りに，全国10都市（福岡・高松・倉敷・函館・神戸・大阪・京都・盛岡・金沢）で開催してきた「街と建物―明治・大正・昭和」全国巡回報告会も，去る11月28・29・30日の３日間に及ぶ東京シンポジウムで無事その幕を閉じた。

シンポジウムでは，最後の地区報告としての「関東地方および東京に現存する近代建築遺産」についての報告が行われた他，海外からの演者による報告，討論等を含み，様々な観点から近代建築の意味・評価や保存・活用に関する討論が行われた。

以下に，各セッション毎の概要を写真と共に紹介しよう。

◈　◈　◈

●第１セッション　11月28日　10：00～12：30

関東地方（東京は除く）に現存する近代建築遺産について，調査にあたった６名の研究者が相互に調査成果を語りあうという形式をとって，①産業・旧軍関係施設（造船・要塞，煉瓦工場，鉄道施設，鉱山施設，発電所等），②都市施設（公共施設，銀行・金融機関，学校），③リゾート施設（那須・日光，軽井沢，湘南地方のホテルや別荘）を中心に，スライドによる報告がなされた。

●第２セッション　同　日　13：30～18：00

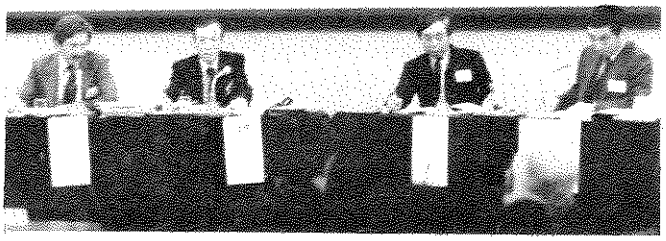
東京に現存する近代建築遺産について，①下町シリーズとしては「看板建築」を始めとする商業建築を中心に，また，②山の手シリーズとしては屋敷や郊外住宅を中心に，これまであまり紹介されることのなかった建築を新しい視点から見直すという立場に立って，スライドによる報告が行われた。

続いて，「文化としての都市景観―明治の東京―」（昭和54年度トヨタ財団助成研究）に関する研究報告が，主に「東京の名所の型」と「建築と敷地の型」の観点から行われた。

その後，上記の２報告と関連して“東京という都市”の歴史性と特殊性を浮き彫りにしながら，東京の都市景観の意味・あり方について，芳賀徹（東京大学教授），H.D.スミス（カリフォルニア大学助教授），磯田光一（文芸評論家），上田篤（大阪大学教授）の各氏による討論が行われた。

●第３セッション　11月29日　10：00～12：30

韓国・台湾から各々２名の研究者をお招きし，旧植民地時代の日本人の建築―それは日本の功罪を端的に表わしているものと思える―を含むそれぞれの国における近代建築遺産について，スライドを中心に貴重な報告がなされた。



（第２セッション　討論風景）

（第３セッション）

●第4セッション　同　日　13：30～18：00

前半は，近代建築のもつ独特な魅力について，画家の近岡善次郎氏より「私の好きな西洋館」と題してスケッチのスライドと共に思い出深いお話を伺った。また，写真家の増田彰久氏よりは，「西洋館の詩」と題して総計500枚にも及ぶ作品のスライドを3面マルチスクリーンに編成して上映して頂いた。

後半は，これまでの各地区における報告会を顧みて，「日本の近代建築をどのように理解するか？」と題した山口廣日本大学教授の基調講演に基づき，「近代建築史研究の課題」についてリスト作成にあたられた若手の研究者を中心に討論が行われた。

●第5セッション　11月30日　10：00～12：30

イタリアよりM. タフーリ教授（ベネツィア建築大学）をお迎えし，「文化的表象としての都市と建築」をテーマに，19世紀後半以来相異なる形で近代的な都市を築いてきたウィーンとニューヨークを事例として取り上げ，両都市の作られ方の相異とその社会的・文化的な背景について論じて頂いた。

●第6セッション　同　日　13：30～18：00

「街と建物の保存学」と題して，当財団の助成による下記の3つの研究報告が行われた。

①保存計画におけるリスト作成の意味（東京大学教授　村松貞次郎）②地域文化財としての近代の遺産（京都大学教授　西川幸治）③保全的刷新：日・欧比較論（東京大学教授　大谷幸夫）

これらの報告の後には，3日間にわたる本シンポジウムとこれまでの地区報告会の総括として，「文化的環境創造のために―近代建築保存活用の意味と方法―」をテーマとして，田村明氏（横浜市技監）を司会に，フロアーからの質疑も混え，各方面の専門家の方々による討論が行われた。

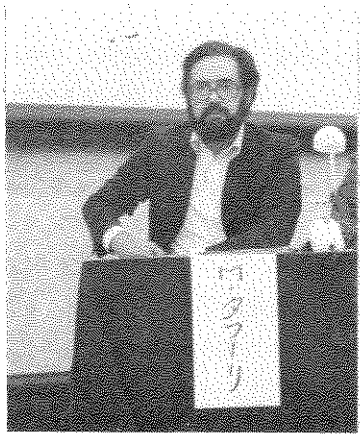
◆　◆　◆

以上が，本シンポジウムの概要であるが，会期中は全国の地区報告関係者，建築家，学生，官庁関係者等多数の方々のご出席を頂き，参加者総数延べ1700人という盛大なものとなりました。ここに改めてご出席頂いた熱心な皆様にお礼申し上げますと共に，これまで温いご支援・ご協力を頂きました各地区の研究者，自治体の方々，市民の方々に対し厚く感謝申し上げます。

（渡辺記）

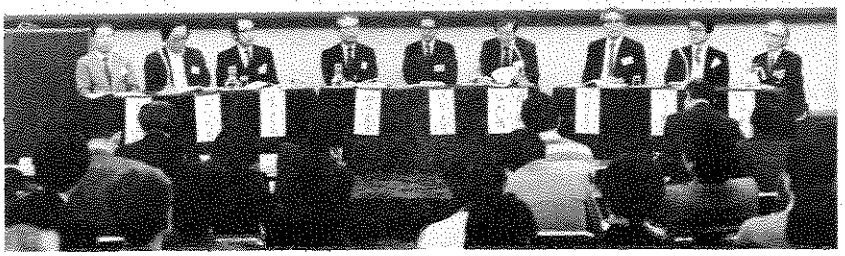
（なお当日配布しましたレジュメ（B―5　90頁）の余部がありますので関心おもちの方は「トヨタ財団　全国巡回報告会係」におハガキでお申込み下さい。）

（第4セッション　講演する山口教授）



（第5セッション　講演するタフーリ教授）

（第6セッション　討論風景）



助成刊行物紹介①

「果てしなき道」

モフタル・ルビス著　押川典昭訳
めこん刊　A5　205頁　1200円

本書は「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成により出版された本のうちの一冊である。

モフタル・ルビスは「45年世代」と呼ばれるインドネシア文学開花期を代表する作家である。

インドネシアは1945年日本敗戦と同時に独立を宣言した。しかし，その後も再植民地化を狙うオランダ軍の挑発と破壊活動が繰り返され，インドネシア各地でゲリラ戦が展開された。この革命闘争の尖鋭的推進力となったのは若い青年たちであった。この小説は革命闘争に参加する者たちの恐怖，苦悩，愛，残忍さ，卑劣さ，勇気を主人公の心理的葛藤を通して描いたものである。

主人公のイサは，優しい素朴な平和愛好者であるが，常に恐怖に怯えて生きている小心な教師である。劣等感のために妻ともうまくゆかない彼が，安らぎを見出すのは，友人のハジルとバイオリンを弾いたり作曲をしている時だけであった。しかし，若いハジルは闘争精神に溢れ，イサを次第に闘争の渦へひき込んでゆく。闘争に参加する青年達の中には，暴力に馴れ，中国人をなぶり殺したりする残酷さを楽しむ者もいた。イサは彼等と行動を共にすることは恐ろしいのだが，行動を共にしないことは更に恐ろしく，成り行きに身を任せて闘争に深入りしてゆく。冷えきっているイサと妻との間隙に，いつしかハジルが入り込むが，イサは妻とハジルの関係を明らかにすることを恐れ，孤独と劣等感に悩みつづける。ついにテロ決行の命令が下り，ハジルが実行し，イサも手を貸す。そして，イサもハジルも捕えられてしまう。ハジルは拷問によって徐々に人格を崩壊させられてゆくが，イサは拷問に耐える。強いはずであったハジルの憐れな姿をみて，イサは，人は皆胸の奥深くに恐怖感を持っていることを悟る。その結果，これからも拷問に耐えてゆける勇気が出てきて，豁然と恐怖から解放される。そして新しい闘争の道を歩み出す決意をする。

著者の革命体験に裏打ちされているため，作中人物は実在感があって，魅力のある作品となっている。

また著者はスカルノ政権下での人権抑圧と支配層の腐敗を批判し，長期間投獄されていたジャーナリストである。

助成刊行物紹介②

「インドネシアの諸民族と文化」

クンチャラニングラット編　加藤剛・土屋健治・白石隆訳　めこん刊　A5　471頁　3500円

「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成の対象となった本書は，1963年3月トゥグにおいて開かれた，インドネシアの社会・文化的多様性に関する教科書編纂のためのセミナーの結果を基に，インドネシア人の人類学者が各章を担当し，インドネシア大学人類学主任教授の編者が編集した，インドネシア人類学の入門的教科書の全訳である。

長きに亘るオランダ植民地支配，3年余の日本軍政から，1945年8月17日に独立を果したインドネシア共和国は，3000有余の島々から成り，300以上の民族集団，250以上の言語が認知されるという，複雑・多様な側面を持った国家である。「インドネシア文化」，「インドネシア人」といった表現に慣れ，インドネシアの民族と文化の多様性を見過ごし勝ちな我々日本人にとって，本書は，インドネシアの国是でもある「多様性の中の統一」というインドネシア理解の出発点を明確にする上で，日本語で読める，はじめての格好の入門書といえよう。

本書では，インドネシアの15の民族とその文化を取り上げて，概観，人口統計，村の形態，経済活動，親族制度，社会構造，宗教，近代化をめぐる諸問題といった諸項目について概説している。入門書とはいえ，インドネシアの一流の人類学者を集め，翻訳者に日本のインドネシア研究の第一線で活躍している3人の学者を揃えた本書は，記述・翻訳の正確さや信頼性の面からも優れた学術書としての価値を備えている。

最後に，第1章から第17章までの各章の見出しを列記して，本書の内容の紹介にかえたい。第1章(以下省略)インドネシアの歴史および文化の概観。スマトラ西海岸沿いの島々とその社会および文化。イリアン・ジャヤ北海岸の住民の文化。バタックの文化。中部カリマンタンの住民の文化。ミナハサの文化。アンボンの文化。フローレスの文化。ティモールの文化。アチェの文化。ミナンカバウの文化。ブギス＝マカッサルの文化。バリの文化。スンダの文化。ジャワの文化。インドネシアの華人文化。開発の中のインドネシア民族と文化の多様性。

（牧田　記）

助成研究報告会

当財団では助成による研究成果を巾広く公開し，今後の一層の研究活動の促進を計ることを目的に，一定のテーマのもとに数件の研究をまとめて報告を行うと共に，関連した討論を行ってきております。この3月には次の2件の報告会を計画中です。関心おもちの方は官製ハガキで財団にお申出下さい。プログラムがまとまりましたらお送りいたします。

○ 第10回報告会（3月14日(土)，於東京）

「環境問題への社会科学的アプローチ――海岸開発と海域保全をテーマとして――」

近年の環境科学の発達には著しいものがある。しかし環境問題が極めて社会的な現象であるにもかかわらず，その研究は主として自然科学分野に限られている。環境問題の深層を捉え，それぞれの社会的実情に応じた対策をとるためには，今後より一層の社会科学分野での研究努力が望まれる。この報告会では，そのような研究として先駆的な意味をもつと思われる下記の2件の研究をとりあげて紹介すると共に，環境問題への社会科学的アプローチに関する討論を行う予定である。また，東南アジアからも専門家をお招きし，途上国の実情を報告していただきたいと考えている。

（報告する研究テーマおよび報告者）

- 不知火海環境汚染に関する学際的総合研究（不知火海総合学術調査団団長・色川大吉他）
- アジア・西太平洋地域における開発に伴う人間環境問題と環境法に関する国際共同研究（人間環境問題研究会会長・加藤一郎他）

○ 第11回報告会（3月28日(土)，於東京）

「地域社会に根ざした保健医療を考える」

国民医療費の増大，高齢化社会への移行に伴い，身近な医療の充実が叫ばれている。医療設備・技術等，医療のハード面においては著しい進歩がみられるが，国民健康保険を初めとする各種の医療保障制度や施設の立地・機能のソフト面については必ずしも充分とは言えず，今後は“地域の特性”を考慮した保健・医療計画の策定が望まれるところである。本報告会では，以上の点に鑑み，これまでの助成研究の中から下記の5件を選び報告および討論を行っていただく予定である。

研究報告―保健医療における地域性―

序．「日本の高齢化社会における医療と福祉に関するシステム分析」

青山学院大学経済学部教授　高森　寛

1．「世帯における社会保障費負担と給付額との対応に関する研究」

お茶の水女子大学家政学部教授　伊藤秋子

2．「大規模病院の新設が無医村地域の医療圏形成に及ぼす影響」

琉球大学保健学部助教授　崎原盛造

3．「保健福祉の町づくりに関する調査研究」

東京大学医学部教授　園田恭一

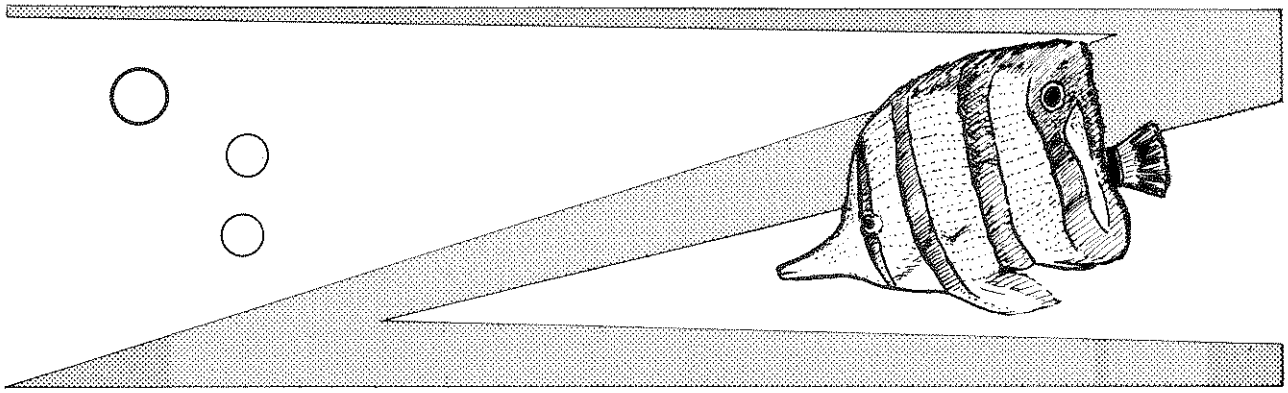
（海外事例報告）

「英国の総合保健サービスにおける医師・保健婦・看護婦の相互協力援助体制の実情に関する調査研究」

大阪大学医学部教授　朝倉新太郎

質疑および関連討論

司　会　厚生省病院管理研究所長　佐分利輝彦



報告書のご案内

これまでに当財団が作成してきた報告会資料等で，下記のものに若干余部があります。ご希望の方はハガキにてレポート係までお申し込み下さい。無料でお送りいたします。

● 助成研究報告会レジュメ

○第3回「日本とアジア諸国の学術交流の課題――3つの国際共同研究を通して――」

○　同上　討論記録

○第4回「太陽エネルギーと光化学」

○第5回「青少年の意識と行動――特にその社会的逸脱現象の実態と対策――」

○第6回「新しい教育システムを目指して――義務教育後を考える――」

○第7回「日本人とアメリカ人――比較研究の意義・方法・可能性――」

○　同上　討論記録

○第8回「高齢化への対応――その長期的な課題を探る――」

○第9回「環境化学物質の超微量分析――国際共同研究による地球規模変化の把握――」

●「街と建物―明治・大正・昭和」全国巡回報告会レジュメ

○九州地区「公共建築の保存・活用をめぐる諸問題」

○近畿地区「近代建築保存・再生の工学的課題」

○東北地区「盛岡市における環境保全制度」

○北陸地区「近代建築保存の意味と方法」

○東京シンポジウム資料

● 研究助成検討資料

○No.1　昭和54年度研究助成・申請者の意見

○No.2　昭和50～54年度研究助成・申請研究テーマ一覧（領域別3分冊）

○No.3　昭和50～54年度研究助成・助成対象一覧

(財)トヨタ財団前評議員神谷正太郎氏ご逝去

(財)トヨタ財団前評議員神谷正太郎氏は，去る昭和55年12月25日心不全のため逝去されました。

神谷氏には当財団設立者として多大のご尽力をいただき，また設立後におきましても理事・評議員として，適切なご発言とご指導を給わり，当財団活動の基礎を築かれました。今後われわれは神谷氏の設立意志に沿って，財団活動をより一層充実させていく所存であります。

同氏はまた，わが国に新しい自動車販売手法を次次と導入し，独特の販売戦略でわが国自動車業界を今日のごとく築き上げられました。

ここに謹んで哀悼の意を表し，ご冥福をお祈り申し上げます。

〈編集後記〉

▶前号で助成研究報告会資料のご案内をいたしましたところ30名以上の方々からご希望をいただきました。財団の活動に関心をよせられる方の多いことを知り感謝いたしております。

▶次号より読者の投書欄を設けようと思います。ニュースレターの記事，あるいは財団の活動内容などについてご意見ご希望などおよせ下さい。書式は自由ですが，字数は400字までとします。あて先は当財団レポート係。

▶所でこのほど郵便料金が値上りしましたが，当財団のように基金の利息収入が一定で，かつ郵便を主なコミュニケーション媒体にしているところではこの値上げは少からず活動内容へも影響を及ぼしてきます。

▶限られた基金を有効に使うためにも，将来的には，皆様方に何らかの形で郵送料金をご負担いただくことも必要になるのではないかと案じたりしております。もちろんそのためには，お金を払っても読んでいただけるようなニュースレターであるべく編集関係者一同努力することはいうまでもありませんが……。

▶話かわって研究助成の公募は例年通り4月，5月に行います。印刷物の上りが3月末ですので，お申し込みの方はできれば3月末以後にお願いいたします。

▶ニュースレターの新規登録お申し込みの方は下記までおハガキで。無料で引き続きお送りいたします。

▶余談ながら，第9回助成研究報告会のレジュメに，フロンガスの環境への悪影響を示唆したくだりがありましたが，その説明図の版下を作っているとき，インスタントレターの定着に使ったスプレーがなんとフロンガス使用でありました。スプレーひとふき分の罪悪感。

トヨタ財団レポート　No.12
発行日　昭和56年1月31日
編集発行　財団法人　トヨタ財団
（担当　久須美雅昭）
印　　刷　㈱八重洲企画